



廃墟のない町

桜井由躬雄*

1985年の正月から2年間にわたって、在ベトナム日本大使館の専門調査員としてハノイに駐在した。ハノイの外国人は許可なくしてハノイ市域を出ることはできない。許可なしで歩ける区域は、南北に6キロ、東西に5キロほどに過ぎない。ハノイ在住外国人の最大の不満は、この制限からくる、なんともいえない閉塞感である。この狭い空間の中に楽しみはないものかと、よく調査と称して大使館を抜け出しては散歩に出かける。

ハノイは東南アジアでもっとも古い町である。史書によれば、1010年、李朝がここに都して昇竜城と呼んだのに始まるとされるが、デルタと山地を結び、また海と雲南を結ぶ、いわゆる衝地にあるハノイの歴史は、もっとずっと古くさかのぼる。1010年としても、ビルマのパガンの建設とほぼ同時代、アンコールワットよりも100年古い。ひとつの町が1,000年にわたって首都であり続けたという例は、アジアではきわめて珍しい（もっとも厳密には、19世紀には一時首都でなくなるが）。

日本大使館は、ハノイ南郊外の労働者団地チュントゥーの一角にある。団地の1ユニットのサイズは、平均して9平方メートルと12平方メートルの2部屋、これに3平方メートルほどの台所と、同サイズの水浴び場・便所がつく。こうしたユニットが1階に6、ひとつのアパートはだいたい5階まであるから30、このアパートがチュントゥー区域だけで30ほどある。1ユニットには4～8人ほどの家族が入るから、超過密である。多くの家は、ベランダに床を張り、壁をつくって小部屋をつくったり、すごいになると、窓から鉄骨を出して、その上に部屋をつくってしまう。建物はすべて煉瓦にしっくいを塗ったものからできている。これが風雨にあたり、かびが生えるから、どの外壁もぞっとしない。

2年ほど前は内職で洗面所に豚を飼うことが流行した。朝になると、豚の鳴声があたりを制したもののだが、1昨年以来の飼料価格の高騰で、今は静かなものである。とはいえ、わずか1平方キロにもみたくないところに、約5,000人が詰めこまれている集団住宅の景観は迫力がある。朝夕のラッシュには、このアパートの入口から洪水のように自転車が吐き出される。戦争中に比べ自転車の供給状況はずいぶん改善されて、今や各家に2台以上の自転車があるから、その混雑はすさまじい。

労働者住宅の中を北に抜けると、突然のように、竹藪に囲まれた「村」が飛び出す。煉瓦が敷かれた小道の両側には、しっくい塀や生垣に囲まれて、小さな煉瓦づくりにしっくいを塗った平屋が建ち並んでいる。家の前庭にはやはり、しっくいや石を敷き詰めた干場があり、その周囲には果樹が植えられ、木の根かたにはベトナム人の好きな盆栽が並んでいる。大きな構えの煉瓦づくりの門をもった家は、もとの地主のものであろう。現在は数家族が共有しているとみえ、たくさんの洗濯物が古びた石像の上にかかって、風に揺れている。寺も神社も、共同井戸も池もある。水田こそないが、蔬菜類やベトナム・スープに入れるザオムオンという水草が、いたるところにつくられている。それもそのはず、この「村」チュントゥーは、19世紀末の地誌『同慶御覽地輿誌図』に「河内省寿昌県金蓮総東作坊中寺村」と記される由緒正しい「村」なのである。ついこの間までは、この「村」にも水田があった。1979年に「村」の水田は政府に買いあげられて、労働者用の集団住宅が建てられた。それがチュントゥー集団住宅であり、その中をさらに鉄条網で囲って、われわれの住むチュントゥー外交団区域ができています。労働者集団住宅は、ベトナムの伝統的な村落の上に、文字通り、重層的に建てられているのである。

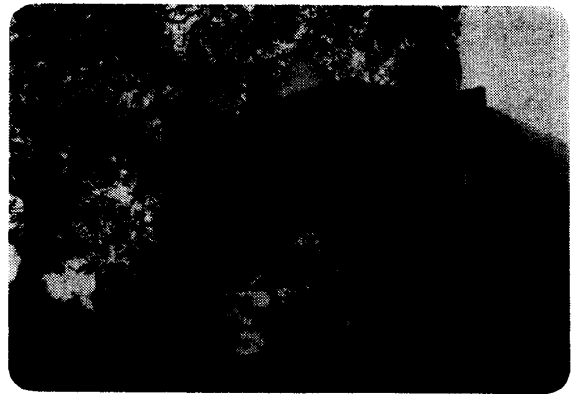
チュントゥー村の北のはずれには、長い土の堤が

* Yumio Sakurai, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

東西に走っている。今は道になっているが、これは本当は19世紀ハノイ城の南端の城壁である。この堤を越えると、本当のハノイが始まる。本当の、という意味は、この一角はほとんどフランスの影響を受けていない、伝統的なベトナム都市の姿を残すからである。まっすぐ北に延びた幅2メートルほどの煉瓦敷きの道の両側には、低い瓦・煉瓦の商店が並ぶ。ところどころに、古びた、これまた煉瓦の門がある。この門は町の中の小区画「坊（フォン）」の入口である。これをくぐると、もう煉瓦、煉瓦の迷路の世界である。まさに中世ベトナムの世界である。

本道に戻って、両側の露店を縫うようにして進むと、カムティエン（欽天、かつて天文をみる役所があった）という大通りに出る。ハノイ駅がまちかい。ハノイ駅前は汽車待ちの人で一杯である。多くの人がごさ持参で、ねっころがったり、将棋を指したりしている。人の海のかなたに、ひどく近代的な外見をもったハノイ駅が白くそびえている。ハノイ駅前を北上すると、旧内城地域に入る。今は、城を思わせる遺構はほとんどない。ただ北門だけが、セメントで塗りつぶされながらも、旧状を保っている。内城地域はかつてフランスの行政関係の建物が多かったところで、みごとに生い茂った並木の下に、フランスの地方都市を思わせるような2階建ての家が散在する。現在は、西半分が党関係の建物と外国公館に、東半分が軍関係の区域になっている。ひととき威容を示すのが、外壁を緑色に統一したソ連大使館と、中国風の楼門をもった中国大使館であり、区域の中央におかれた巨大なレーニン像である。ここはいわば、伝統的なベトナム建築を根こそぎ破壊して、まったく別なフランスの町をつくりあげ、さらにその上に社会主義建造物がのった町である。この区域の西の外れに、ホーチミンの巨大な大理石のパテオン風廟によりそうように、ハノイの象徴である一柱寺がひっそりと建っている。

城の北端を東西に走るファンディンフン通りを東に抜けると、市場街ドンヌアン地区である。ここは



ハノイのイスラム寺院

かつて、城と紅河の間の砂州に生まれた商業区域であり、13世紀以降、36坊と呼ばれていた。現在も、紅河堤防の真裏にあたるドンヌアン市場から南西方面に無数の小商店が密集し、その間に華僑系の神社・寺がもぐりこむように建っている。現在は幼稚園になっているが、かつての粵東会館の荘厳な石造の建物が市場のうしろに現存しているし、市場の西にはベトナム・イスラム教会の本拠であるモスクが建っている。ベトナムでもっとも東南アジアの都市らしい一角である。

ハノイには村があり、団地があり、コロニアルな住宅地があり、駅があり、刑務所があり、城があり、教会があり、寺があり、モスクがあり、神社があり、フランスがあり、中国があり、東南アジアがあり、そしてそれらがそれぞれに生きている。廃墟のない町である。つまり、この町ではなにものも廃棄されることがない。すべてが上へ上へと累積される。その最上層に壮大な社会主義建造物がある。町そのものが物理的に重層なばかりではなく、その町のつくり出す文化も重層的である。ベトナム人との会話の中でも、マルキストの奥にはフランス官吏が顔を出し、さらにそのうしろからはベトナム伝統官人が顔を出す。ベトナムという国を理解する鍵は、どうもハノイのこの文化的重層性にあるような気がする。（京都大学東南アジア研究センター助教授）